古文の文法ならびに別記については藤女子大学助教授根来司氏の絶大な協力があったことを記し、あつく感謝の意をあらわす。

著者

目次

「古文の文法」編纂主旨……一

一　はじめに

〔一〕文法で取り扱う文章……四
〔二〕文……五
〔三〕文節……五
〔四〕かなづかい……六
〔五〕本書の用語について……九

二　体言　副詞　連体詞　接続詞　感動詞

〔一〕活用のない自立語……一一
〔二〕体言……一一
〔三〕副詞……一三
〔四〕連体詞……一七
〔五〕接続詞……一七
〔六〕感動詞……一九

三　用言

〔一〕活用のある自立語……二三
〔二〕用言……二三
〔三〕用言の活用……二四
〔四〕動詞……二五
四段活用・上一段活用・上二段活用
下一段活用・下二段活用・カ行変格活用
サ行変格活用・ナ行変格活用・ラ行変格活用
〔五〕形容詞……二三
ク活用・シク活用
〔六〕形容動詞……四三
ナリ活用・タリ活用
〔七〕用言の音便……四七
動詞の音便・形容詞の音便・形容動詞の音便

四　助動詞

[一] 活用のある付属語……六五
[二] 助動詞……六五
[三] 受身・自発・可能・尊敬の助動詞……六六
る・らる
[四] 使役・尊敬の助動詞……六七
す・さす・しむ
[五] 否定の助動詞……六八
ず
[六] 回想の助動詞……七〇
き・けり
[七] 完了の助動詞……七四
ぬ・つ・たり・り
[八] 推量の助動詞……八〇
む・むず・じ・べし・まじ・らむ・けむ・らし・まし
[九] 希望の助動詞……一〇二
まほし・たし
[一〇] 断定の助動詞……一〇三
なり・たり
[一一] 推定の助動詞……一〇五
なり・めり
[一二] 比況の助動詞……一一〇
ごとし
[一三] 助動詞の音便……一一一

五　助詞

[一] 活用のない付属語……一一四
[二] 助詞……一一四
[三] 格助詞……一一五
が・の・を・に・へ・と・より・にて
[四] 接続助詞……一一三
ば・とも・ど・ども・が・に・を・て・して・で・つつ
[五] 係助詞……一一六
は・も・ぞ・なむ・や・か・こそ
[六] 副助詞……一一六
だに・すら・さへ・し・のみ・ばかり・まで・など
[七] 終助詞……一一四
な・な…そ・な・ばや・なむ・がな・かな・かし
[八] 間投助詞……一一五
よ・や・を

六　敬語

[一] 現代語の敬語……一一六
(付)敬語の分類……一一六
[二] 動作主尊敬……一一六
[三] 対象尊敬……一一六
[四] 動作主尊敬と対象尊敬の重用……一一七
[五] 丁寧……一一九
[六] 謙譲……一一九

七　文の構成

[一] 文……一一七
[二] 文の構成の単位……一一七
[三] 文節と文素……一一七
[四] 連体修飾……一一七
[五] 文素のかかり方……一一八
[六] 文の構成の一——主述の関係……一一八
[七] 文の構成の二——修飾被修飾の関係……一一九、
[八] 文の構成の三——並列の関係……一一九
[九] 文の構成の四——独立……一一九
[一〇] 文の構成の五——まとめ……一二〇

「古文の文法」引用書一覧

万葉集　大伴家持撰といわれる。二十巻。古代より天平宝字三年（七五九）までの歌を集めたもの。
伊勢物語　作者不明。九世紀末か十世紀はじめのころできた。在原業平についての歌物語。
古今和歌集　紀貫之等撰。二十巻。延喜五年（九〇五）撰上。平安初中期の歌を集めたもの。
土佐日記　紀貫之作。承平五年（九三五）にできた。土佐から京都までの旅日記。
竹取物語　作者不明。十世紀なかばごろの作。かぐやひめの物語。
拾遺和歌集　花山法皇等撰。二十巻。長徳二年（九九六）撰上。平安中期の歌を集めたもの。
源氏物語　紫式部作。五十四帖。十世紀末か十一世紀はじめの者。光源氏を中心とする貴族の生活をうつした物語。
和泉式部日記　和泉式部作。十一世紀はじめの著。自分の恋愛を第三者的に物語風に記したもの。
枕草子　清少納言作。十一世紀はじめの著。宮廷生活や自然・人事についての随筆。
更級日記　菅原孝標女作。十一世紀なかばの著。自己の過去を追想して書いた日記。
堤中納言物語　作者不明。十巻。平安末期にできた。短篇物語集。
大鏡　作者不明。十二世紀はじめの作。藤原氏を中心とした記伝体の歴史物語。
今昔物語集　編者不明。三十一巻。十二世紀はじめの作。説話集。
方丈記　鴨長明作。建暦二年（一二一二）にできた。平安末の天変地異と社会の混乱を述べたもの。
平家物語　作者不明。十二世紀末から十三世紀はじめごろの作。平家興亡のあとを述べた軍記物語。
宇治拾遺物語　編者不明。十五巻。十三世紀はじめの作。説話集。
徒然草　兼好法師作。元弘元年（一三三一）にできた。身辺の雑事についての随筆。

なお、源氏物語は青表紙本、枕草子は三巻本、平家物語は覚一本によった。

「古文の文法」編纂主旨

本書（「古文の文法」を以下こう呼ぶ）を編纂した主旨は、本書「はしがき」にも少々ふれたごとく、主として高等学校の生徒に、古文読解のために必要な古文の文法のあらましを知らしめようとしたものである。そのためには、まず基本的態度として、次のような立場をとった。

1　生徒は、ほとんど古文についてなにも知らないだろうということを前提とした。

これは戦前の中学生が、すでにかなりの文語文にふれて、なじんで来ていたことと比べると、まったく驚くほどのかわり方である。そのために、昔の教育によって勉強して来た先生方には、思いがけないところに支障がおきて、慨嘆させられることがあろう。そこで本書では、まず、生徒は古文についてなにも知らないということをつねに念頭において学習がすすむようにくふうした。

2　高等学校における古文の文法は、文法学を学習するのではなくて、古文の読解の利便のためになされるべきものであるという態度で徹底した。

そのため、いわゆる文法学的な問題に過ぎないものは、つとめてとりあげなかった。たとえば、文節論とか、品詞の分け方とかいうものは、口語文法においてこそ価値のあるものであるが、古文の文法にはそれほどの意味があるものではない。

形容動詞型〔ナリ活用型……なり（断定）
　　タリ活用型……たり（断定）〕
特殊型……ず　き　むず　まし
無変化型……じ　らし

また、活用する語のどんな活用形につくかによって分けると、次のようになる。

未然形に……る　らる　す　さす　しむ　ず　む　むず　じ　まし　まほし
連用形に……き　けり　ぬ　つ　たり（完了）　けむ　たし
終止形に……べし　まじ　らむ　らし　なり（推定）　めり（ラ変型に活用する語には連体形に）
連体形に……なり（断定）　ごとし
命令形に……り
体言、助詞に……なり（断定）　たり（断定）　ごとし

形式を重視する文法学の立場では、右のような分類も意味があるが、本書では、それぞれの助動詞の意味・用法をよく覚えさすことが一番大切であるという立場から、普通に行なわれているように、意味によって分けることにした。しかし、助動詞の活用と接続というものも、正しく助動詞をとり出し、その用法を研究するために必要であることは言うまでもない。意味・活用・接続の三方面は、どうしても生徒に暗記させなければならないものであろう。

【三】受身・自発・可能・尊敬の助動詞

る　らる

「る」「らる」は自分が何もしないのに、ひとに何かをされるという意（受身）をあらわす。また、自然にそうなるという意（自発）をあらわし、できるという意（可能）をあらわす。さらには、動作をする人を尊敬する意（尊敬）をあらわす。

さて、「る」「らる」はそれが受身か自発か可能か判断を下しえないものもあるが、平安時代までのものでは、山田孝雄博士が「平安朝文法史」で、

イ、日本語ではもともと無生物を主語とする受身のいい方はなかった。

ロ、可能の「る」「らる」は、否定の形でだけ用いられた。

と説いたことが一応の目安になる。しかし、院政時代以後になると、

入道殿の御さかえを申さんと思ふほどに、余教のとかるるといひつべし。（大鏡、序）

二人とばかり書かれて三人とは書かれざりけり。（平家物語、足摺）

冬はいかなる所にも住まる。（徒然草、第五五段）……可能

というように、無生物が受身の主語になった例も、否定以外の「る」「らる」で可能として用いられた例も出て来るのである。

【四】使役・尊敬の助動詞

す　さす　しむ

「す」「さす」はだれかが力を加えて、ひとに何かをさせるという意（使役）をあらわす。さらに、動作をする人を尊敬する意（尊敬）をあらわす。「しむ」も「す」「さす」と同じく使役や尊敬の意をあらわすが、平安時代にはもっぱら「す」「さす」のほうが用いられて「しむ」はほとんど用いられない。

「す」「さす」「しむ」もそれが使役か尊敬か判断に迷うようなものがある。が、使役の対象があって「ひとをし